

国際防災・人道支援フォーラム2022

「避難スイッチ」と「セカンド ベスト」で考える豪雨災害 に対する備え



矢守 克也

京都大学防災研究所・教授
(防災心理学・災害情報学)



トークのポイント

- 豪雨災害からの避難：防災心理学の視点から
- 3つのキーワード：「避難スイッチ」・「セカンドベスト」・「空振り」改め「素振り」
- 「避難スイッチ」
 - 情報よりも情報と行動の橋わたし
 - 身近な異変、（狭義の）情報、（「既往最大」）
- 「セカンドベスト」
 - 「2階まで避難訓練」
 - （「玄関まで避難訓練」）
 - （「お誘い型訓練」）
- 「空振り」改め「素振り」

避難について考えるときに大事な たった2つのこと

- 「いつ」逃げるのか
= 何を「避難スイッチ」にして逃げるのか
- 九州北部豪雨（2017年）：「5年前も最初に浸かった家をスイッチに」（福岡県朝倉市）
- 東北豪雨（2017年）：「前年の岩手県のグループホームの災害を教訓に雄物川の水位データをスイッチに」（秋田県大仙市）
- 「どこへ」逃げるのか
- 西日本豪雨：京丹波町の「お堂」⇒集落内、近所に「セカンドベスト」（次善：100点満点でなくても60点とれる場所）も見つける行政の指定する避難場所もちろん大事

「避難スイッチ」(2017年西日本豪雨)

朝倉市平榎地区

5年前を契機に独自
に決めていた基準
37世帯92人全員
が無事に避難

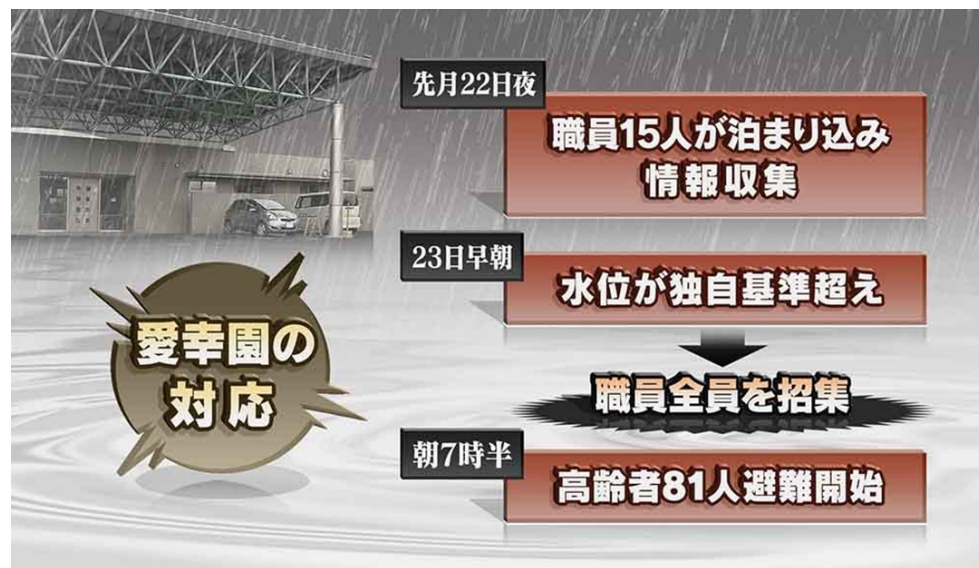


住民の間ではこの小さな川の水量と浸水被害が出た住宅の状況が避難をする際の1つの判断基準になったということです。(中略)独自の判断基準に水位が達したとして、すぐに声を掛け合って高い場所にある住宅に避難を始め、そのおよそ1時間後に濁流が地区を襲いました。平榎地区に住む日野洋さんは「日頃からの住民どうしの強固なつながりに加え、5年前の経験で地域住民の防災意識が向上し、無事に避難することができた」と話していました。

秋田県大仙市特別養護老人ホーム「愛幸園」の事例



平成28年台風10号による岩手県岩泉町のグループホームでの災害を教訓に
参照情報：「7月の豪雨から学ぶ～九州北部豪雨1ヶ月～」(NHK時論公論2017年08月04日放送)



兵庫県宝塚市川面地区の取り組み

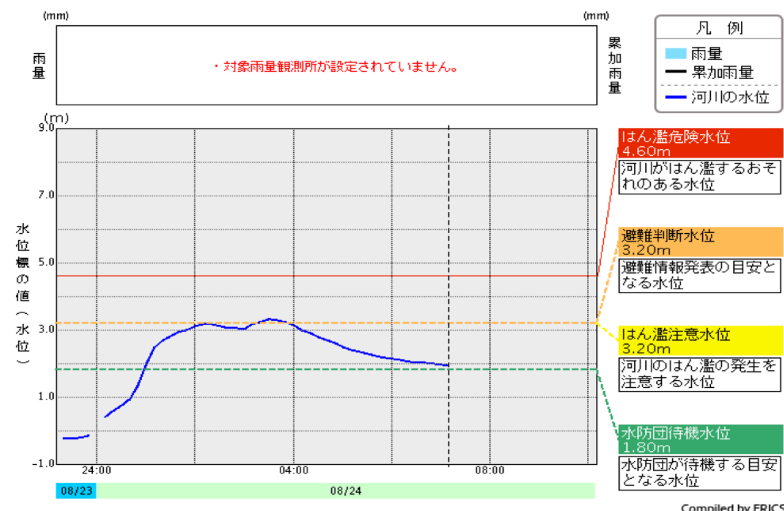


川面地区防災スイッチ

KAWAMO'S DISASTER RESPONSE SWITCH



平成30年7月5日（木）10：54

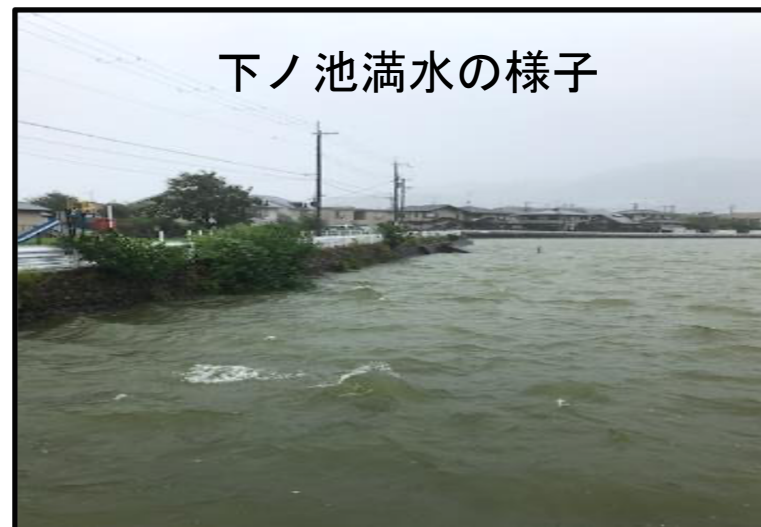


武庫川河川水位（平成30年8月24日）

“避難スイッチ”の例（宝塚市川面地区）



写真提供：兵庫県宝塚市川面地区自主防災会



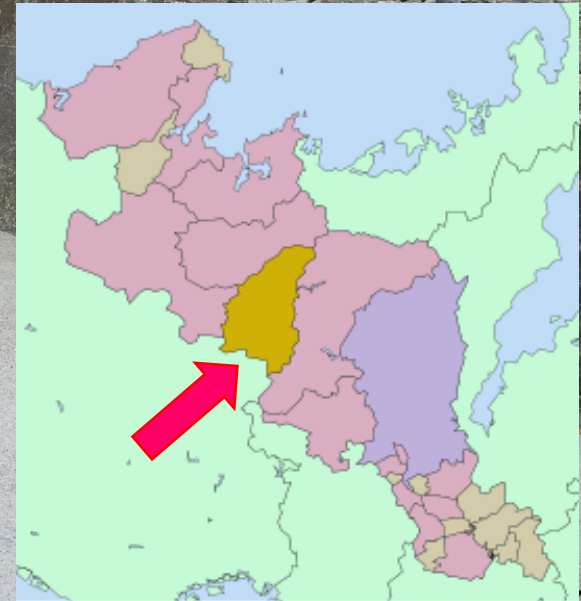
平成30年9月4日（火）14：51

「セカンドベスト」 2018年7月西日本豪雨

撮影：矢守

@京丹波町上乙見地区

(人口44人、高齢化率50%)



50km

消防団
リーダー



一時避難
「お堂」



取り残され
た9人



集落出口の
崩落箇所



避難所
(集落外)



集落内の
崩落箇所



自宅裏山が
崩壊



2018年7月西日本豪雨

- 犠牲者合計：51人
- 65歳以上：45人（約90%）
- 自宅で：44人（約86%）
- 自宅の1階で：42人（約81%）
- そのうち平屋：21人、2階建て：21人
- 「2階へ上がる」という考え・準備・訓練
- 「2階まで避難訓練」の実施

倉敷市真備地区

「空振り・素振り」

早めの避難、母救った

西日本豪雨3週間 復興へ道遠く

西日本豪雨による綾部市旭町の土砂崩れで、91歳の女性が家が全壊するう目前に避難し、命が助かった。救ったのは、大雨のたびに女性を早めに避難させていた家族の行動。7日未明に記録的豪雨が降ると予測していた。

綾部の女性 5年で20回空振りも…

「あの家にいたら母が危ない」。池田（旧姓・岩崎）静子さん（64）は5日午後、西日本各地を襲い始めた記録的豪雨のニュースを見て胸騒ぎがした。「綾部でも降るかもしれない」。長女（25）に頼んで、山間地の旭町に1人で住む母・岩崎てるみさん（91）を車で迎えにいつてもらい、5日夕、街中にある綾部市大島町の自宅に避難させた。

雨は6日午後、小康状態に。てるみさんは「たいしたことない。（旭町に）帰る」と言い始めた。「帰ってはダメ。綾部の雨はこれから本番」。池田さんは引き留め、1泊させた。テレビニュースは発達した雨雲が列をなす「線状降水帯」が広島県に甚大な被害を与えていると報じていた。

7日未明。綾部市内の天気は一変した。3時間で150mmの記録的豪雨が襲った午前3時半ごろ、旭町に残って



母のてるみさん（左）と避難当時をふり返る池田さん（綾部市内旭町を襲った土砂崩れ、右端の下から3棟目がてるみさんの家。7日、小型無人機で撮影）／綾部市提供

「続けて良かった」

いた住民らは「ゴォー」という音を聞いた。集落正面の山が高さ約50m、幅約50mにわたって崩落。押し寄せた土砂はてるみさんの家を突き破って寝室に達した。市内最大の土砂崩れだった。てるみさんは「あそこいたら死んでいた」とふり返る。

実は池田さんがてるみさんを早めに避難させたのは今回が初めてではない。旭町では同じ現場で5年前にも同規模の土砂崩れが発生し、てるみさんの家の手前まで土砂が迫ったことがあった。池田さんは以来、雨雲の動きをニュースでチェックし、台風や大雨のたびに自宅に連れ出していた。

5年間で避難は20回を越え、今回までは「空振り」だった。だが、池田さんは言う。「5年前の土砂崩れを目の当たりにしなかったら、早めに避難させなかったかもしれない。でも、今は未経験の雨が降る。人ごとではなく、自分や家族に危険が起ころうと考える、行動を起こすことが大事ではと」。

（八幡一男）



「京都新聞」（2018年8月5日付）から